

国語学習プリント

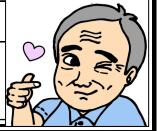
date : 年 月 日

学習内容：状況の中で――自分は何を思うのか

年 組 番

故郷 魯迅

氏名



故郷

魯迅

竹内好訳

厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、私は帰った。

もう真冬の候であった。そのうえ、故郷へ近づくとつれて、空模様は怪しくなり、冷たい風がヒューヒュー音を立てて、船の中まで吹き込んできた。苦の隙間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。覚えぬ寂寥の感が胸に込み上げた。

ああ、これが二十年来、片時も忘れることのなかった故郷であろうか。

私の覚えていた故郷は、まるでこんなふうではなかった。私の故郷は、もつとずっとよかった。その美しさを思い浮かべ、その長所を言葉に表そうとすると、しかし、その影はかき消され、言葉は失われてしまう。やはりこんなふうだったかもしれないという気がしてくる。そこで私は、こう自分に言い聞かせた。もともと故郷はこんなふうなのだから、進歩もないかわりに、私が感じるような寂寥もありはしない。そう感じるのには、自分の心境が変わっただけだ。なぜなら、今度の帰郷は決して楽しいものではないのだから。

今度は、故郷に別れを告げに来たのである。私たちが長いこと一族で住んでいた古い家は、今ももう他人の持ち物になってしまった。明け渡しの期限は今年いっぱいである。どうしても旧暦の正月の前に、住み慣れた古い家に別れ、なじみ深い故郷をあとにして、私が今暮らしを立てている異郷の地へ引っ越さねばならない。

明るく日の朝早く、私は我が家の表門に立った。屋根には一面に枯れ草のやれ茎が、折からの風になびいて、この古い家が持ち主を変えるほかなかった。

た理由を説き明かし顔である。いっしょに住んでいた親戚たちは、もう引っ越してしまつた後らしく、ひっそり閑としていた。自宅の庭先まで来てみると、母はもう迎えに出ていた。後から、八歳になる甥のホニル（宏児）も飛び出した。

母は機嫌よかつたが、さすがにやるせない表情は隠し切れなかつた。私を座らせ、休ませ、茶をついでくれなどとして、すぐ引っ越しの話は持ち出さない。ホニルは、私とは初対面なので、離れた所に立つて、じつと私の方を見つめていた。

だが、とうとう引っ越しの話になった。私は、あちらの家はもう借りてあること、家具も少しは買ったこと、あとは家にある道具類をみんな売り払つて、その金で買い足せばよいこと、などを話した。母もそれに賛成した。そして、荷造りもほぼ終わったこと、かさばる道具類は半分ほど処分したが、よい値にならなかつたこと、などを話した。

「一、二日休んだら、親戚回りをしてね、そのうでたつとしよう。」と、母は言った。

「ええ。」

「それから、レントウ（閩土）ね。あれが、いつも家へ来るたびに、おまえのうわさをしては、しきりに会いたがついていましたよ。おまえが着くおよその日取りは知らせておいたから、今に来るかもしれない。」

このとき突然、私の脳裏に不思議な画面が繰り広げられた。紺碧の空に、金色の丸い月が懸かっている。その下は海辺の砂地で、見渡すかぎり緑のすいかが植わっている。その真ん中に、十一、二歳の少年が、銀の首輪をつるし、鉄の刺叉を手にして立っている。そして、一匹の「チャー」（猪）を目がけて、ヤツとばかり突く。すると「チャー」は、ひらりと身をかわして、彼の股をくぐって逃げてしまう。

この少年がレントウである。彼と知り合ったとき、私もまだ十歳そこそこだった。もう三十年近い昔のことである。その頃は、父もまだ生きていたし、

家の暮らし向きも楽で、私は坊ちゃんにいられた。ちようどその年は、我が家が大祭の当番に当たっていた。この祭りの当番というのが、三十何年目にただ一回順番が回ってくるとかで、ごく大切な行事だった。正月に、祖先の像を祭るのである。さまざまの供物をささげ、祭器もよく吟味するし、参詣の人も多かった。祭器をとられぬように番をする必要があった。私の家には、「マンユエ」（忙月）が一人いるだけである。「私の郷里では、雇い人は三種類ある。年間通して決まった家で働くのが「チャンネン」（長年）、日決めて働くのが「トアング」（短工）、自分でも耕作するかたわら、年末や節季や年貢集めのときなどに、決まった家へ来て働くのが「マンユエ」とよばれた。」一人では手が足りぬので、彼は、自分の息子のレントウに祭器の番をさせたが、と私の父に申し出た。

父はそれを許した。私もうれしかった。というのは、かねてレントウという名は耳にしていたし、同じ年頃なこと、また、閩月の生まれで、五行の「土」が欠けているので、父親がレントウ（閩土）と名づけたことも承知していたから。彼は、わなをかけて小鳥を捕るのがうまかつた。

それからというもの、来る日も来る日も新年が待ち遠しかった。新年になればレントウがやって来る。待ちに待った年末になり、ある日のこと、母が私に、レントウが来たこと知らせてくれた。飛んできてみると、彼は台所にいた。艶のいい丸顔で、小さな毛織りの帽子をかぶり、きらきら光る銀の首輪をはめていた。それは父親の溺愛ぶりを示すもので、どうか息子が死なないようにと神仏に願をかけて、その首輪でつなぎ止めてあるのだ。彼は人見知りだったが、私にだけは平気で、そばに誰もいないとよく口をきいた。半日もせずに、私たちは仲よくなった。

そのとき何をしゃべったかは、覚えていない。ただ

国語学習プリント

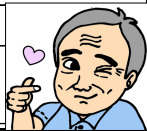
date : 年 月 日

学習内容：状況の中で--自分は何を思うのか

年 組 番

故郷 魯迅

氏名



ルトウが、城内へ来ていろいろ珍しいものを見た
と言って、はしゃいでいたことだけは記憶に残ってい
る。

明るる日、鳥を捕ってくれと頼むと、彼は

「だめだよ。大雪が降ってからでなきゃ。おいらとこ、
砂地に雪が降るだろ。そうしたら、雪をかいて、少
し空き地をこしらえるんだ。それから、大きな籠
を持ってきて、短いつかい棒をかって、屑粉をまく
んだ。そうすると、小鳥が来て食うから、そのとき
遠くの方から、棒に結わえてある縄を引っ張るん
だ。そうすると、みんな籠から逃げられないんだ。
何だっているぜ。タオチー（稻鶏）だの、チアオチー
（角鶏）だの、はとだの、ランペイ（藍背）だの……」
それから雪の降るのが待ち遠しくなった。
ルトウはまた言うのだ。

「今は寒いけどな、夏になったら、おいらとこへ来る
といいや。おいら、昼間は海へ貝殻拾いに行くんだ。
赤いのも、青いのも、何でもあるよ。『鬼おどし』も
あるし、『観音様の手』もあるよ。晩には、父ちゃん
とすいかの番に行くのさ。おまえも来いよ。」
「どろぼうの番？」

「そうじゃない。通りがかりの人が、喉が渴いて、す
いかを取って食ったって、そんなの、おいらとこじゃ
どろぼうなんて思やしない。番をするのは、穴熊や
はりねずみや、チャーさ。月のある晩に、いいかい、
ガリガリって音がしたら、チャーがすいかをかじって
るんだ。そうしたら、手に刺叉を持って、忍び寄っ
て……。」

そのとき私は、その「チャー」というのがどんなも
のか、見当もつかなかった。今でも見当はつかな
い。が、ただなんとなく、小犬のような、そして
獐猛な動物だという感じがした。

「かみつかない？」

「刺叉があるじゃないか。忍び寄って、チャーを見つ
けたら突くのさ。あん畜生、利口だから、こっちへ

走ってくるよ。そうして、腰をぐくぐって逃げてしま
うよ。なにしろ、毛が油みたいに滑つて……。」

「こんなにたくさん珍しいことがあろうなど、それ
まで私は思ってもみなかった。海には、そのような
五色の貝殻があるものなのか。すいかには、こんな
危険な経歴があるものなのか。私はすいかといえは、
果物屋に売っているものとはかり思っていた。

「おいらとこの砂地では、高潮の時分になると『跳
ね魚』がいっぱい跳ねるよ。みんな、かえるみたいな
足が二本あって……。」

ああ、ルトウの心は神秘の宝庫で、私の遊び仲
間とは大違いだ。こんなことは、私の友達は何も知っ
てはいない。ルトウが海辺にいらるとき、彼らは私と
同様、高い堀に囲まれた中庭から四角な空を眺め
ているだけなのだ。

惜しくも正月は過ぎて、ルトウは家へ帰らねば
ならなかった。別れがつかなくて、私は声を上げて泣
いた。ルトウも台所の隅に隠れて、嫌がって泣いて
いたが、とうとう父親に連れてゆかれた。その後
彼は父親にこづけて、貝殻を一包みと、美しい鳥
の羽を何本か届けてくれた。私も一、二度何か贈
り物をしたが、それきり顔を合わす機会はなかつ
た。

今、母の口から彼の名が出たので、この子供の頃
の思い出が、電光のように一挙によみがえり、私は
やつと美しい故郷を見た思いがした。私はすぐこう
答えた。

「そりやいいな。でー今、どんな？……。」

「どんなって……、やつぱり、楽ではないようだが……
。」

「あの連中、また来ている。道具を買うという口実
で、その辺にある物を勝手に持ってゆくのだ。ちよっ
と見てくるからね。」

母は、立ち上がって出ていった。外では、数人の女
の声かしていた。私は、ホルルをこちらへ呼んで、話

し相手になってやった。字は書ける？ よそへ行く
の、うれしい？ などなど。

「汽車に乗ってゆくのか？」

「汽車に乗ってゆくんだよ。」

「お船は？」

「初めに、お船に乗って……。」

「まあまあ、こんなになって、ひげをこんなに生やし
て。」不意に甲高い声が響いた。

びつくりして、頭を上げて見ると、私の前には、頬
骨の出た、唇の薄い、五十がらみの女が立っていた。
両手を腰にあてがい、スカートをはかないスボン姿
で足を開いて立ったところは、まるで製図用の脚の
細いコンパスそっくりだった。

私はどきんとした。

「忘れたかね。よくだっこしてあげたものだが。」

ますますどきんとした。幸い、母が現れて口添え
してくれた。

「長いこと家になかったから、見忘れてしまつてね。
おまえ、覚えてるだろ。」と、私に向かって、「ほら、
筋向かいのヤン（楊）おばさん……豆腐屋の。」

そうそう、思い出した。そういえば子供の頃、筋
向かいの豆腐屋に、ヤンおばさんという人が一日中
座っていて、「豆腐屋小町」とよばれていた。し
かし、その人ならおしろいを塗っていたし、頬骨も
こんなに出ていないし、唇もこんなに薄くはなかつ
たはずだ。それに一日中座っていたのだから、こん
なコンパスのような姿勢は、見ようにも見られなかつ
た。その頃うわさでは、彼女のおかげで豆腐屋は商
売繁盛だとされた。たぶん年齢のせいだろうか、私
はそういうことにさっぱり関心がなかった。そのた
め見忘れてしまったのである。ところがコンパスの
ほうでは、それがいかにも不服らしく、蔑むような
表情を見せた。まるで、フランス人のくせにナポリ
オンを知らず、アメリカ人のくせにワシントンを知
らぬのを嘲るといった調子で、冷笑を浮かべながら、

国語学習プリント

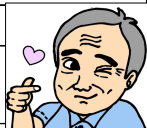
date : 年 月 日

学習内容：状況の中で--自分は何を思うのか

年 組 番

故郷 魯迅

氏名



らねばならぬと言う。それに昼飯もまだと言うので、自分で台所へ行って、飯をいためて食べるように勧めた。

彼が出ていった後、母と私とは彼の境遇を思つてため息をついた。子だくさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主、みんな寄つてたかつて彼をいじめて、てくのぼうみみたいな人間にしまったのだ。母は、持つていかぬ品物はみんなくれてやろう、好きなように選はせよう、と私に言った。

午後、彼は品物を選び出した。長テーブル二個、椅子四脚、香炉と燭台一組、大秤一本。その他、わら灰もみんな欲しいと言った。(私たちのところでは、炊事するときわらを燃す。その灰は砂地の肥料になる。) 私たちが旅立つとき来て船で運ぶ、と言った。

夜はまた世間話をした。とりとめのない話ばかりだった。明るる日の朝、彼はシュイションを連れて帰っていった。

それからまた九日して、私たちの旅立ちの日になった。レントウは朝から来ていた。シュイションは連れずに、五歳になる女の子に船の番をさせていた。それぞれに一日中忙しくて、もう話をする暇はなかった。客も多かった。見送りに来る者、品物を取りに来る者、見送りながら品物を取りに来る者。夕方になって、私たちが船に乗り込む頃には、この古い家にあった大小さまざまながらくた類は、すっかり片づいていた。

船はひたすら前進した。兩岸の緑の山々は、たそがれの中で薄墨色に変わり、次々と船尾に消えた。私といっしょに窓辺にもたれて、暮れてゆく外の景色を眺めていたホルンが、ふと問いかけた。

「伯父さん、僕たち、いつ帰ってくるの。」

「帰ってくる？ どうしてまた、行きもしないうちに、帰るなんて考えたんだい。」

「だって、シュイションが僕に、家へ遊びに来いって。」

大きな黒い目をみはつて、彼はじつと考え込んでいた。

私も、私の母も、はつと胸をつかれた。そして、話がまたレントウのことに戻った。母はこう語った。例の豆腐屋小町のヤンおばさんは、私の家で片づけが始まってから、毎日必ずやつて来たが、おととい、灰の山から碗や皿を十個余り掘り出した。あれこれ議論の末、それはレントウが埋めておいたにちがいない、灰を運ぶとき、いっしょに持ち帰れるから、という結論になった。ヤンおばさんは、この発見を手柄顔に、「犬じらし」(これは私たちのところで鶏を飼うのに使う。木の板に柵を取り付けた道具で、中に食べ物を入れておくと、鶏は首を伸ばしてついでに食べ物を入れておくと、鶏は首を伸ばしてついでに食べ物を入れておくと、犬にはできないので、見てくれるだけである。)をつかんで飛ぶように走り去った。纏足用の底の高い靴で、よくも思うほど速かったそうだった。

古い家はますます遠くなり、故郷の山や水もますます遠くなる。だが名残惜しい気はしない。自分の周りに目に見えぬ高い壁があつて、その中に自分だけ取り残されたように、気がめいるだけである。すいか畑の銀の首輪の小英雄の面影は、元は鮮明このうえなかったのが、今では急にぼんやりしてしまった。これもたまらなく悲しい。

母とホルンとは寝入った。

私も横になって、船の底に水のぶつかる音を聞きながら、今、自分は、自分の道を歩いているとわかった。思えば私とレントウとの距離は全く遠くなったが、若い世代は今でも心が通い合い、現にホルンはシュイションのことを慕っている。せめて彼らだけは私と違って、互いに隔絶することのないように……とはいっても、彼らが一つ心でいたいがために、私のように、むだの積み重ねで魂をすり減らす生活を共にすることは願わない。また、レントウのように、打ちひしがれて心が麻痺する生活を共にすること

も願わない。また、他の人のように、やけを起こして野放図に走る生活を共にすることも願わない。希望をいえば、彼らは新しい生活をもたなくてはならない。私たちの経験しなかった新しい生活を。希望という考えが浮かんだので、私はどきどきとした。たしかレントウが香炉と燭台を所望したとき、私は、相変わらずの偶像崇拜だ、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかに彼のことを笑つたものだが、今私という希望も、やはり手製の偶像にすぎぬのではないか。ただ、彼の望むものはすぐ手に入り、私の望むものは手に入りにくいだけだ。まどろみかけた私の目に、海辺の広い緑の砂地が浮かんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月が懸かっている。思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえぬ。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

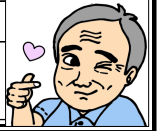
国語学習プリント

date : 年 月 日

学習内容：状況の中で--自分は何を思うのか

故郷 魯迅 ワークシート①

氏名



☆故郷の様子

① 二十年ぶりに帰った故郷（遠景）

▽季節 真冬の候

▽天候 どんよりとした曇り空

▽帰省手段 船 魯迅の故郷はシャオシン（紹興）、運河が発達していた。

○そこから見た故郷の光景（印象） 〈一文〉

苦の隙間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。

苦 船の屋根を覆う筵のようなもの

▼その光景に感じたことは

寂寥の感

寂寥 Ⅱ もの寂しい様子

◎ 私の覚えている故郷は、まるでこんなふうではなかった。私の故郷は、もつとずっとよかった。

▽ と、言いながら「やはりこんなふうだったかもしれない」「もともと故郷はこんなふうなのだ」と言い聞かせるにあたり、それは、何のせい（原因）としているか。

心境の変化

Ⅱ 「今度の帰郷は決して楽しいものではないのだから」

住み慣れたなじみ深い故郷に別れを告げねばならない（引越

さねばならない）という、つらく悲しい気持ちであったことが

「寂寥の感」を呼んでしまったと思いたい。

自分が悲しい気持ちだったから、故郷が寂しく見えた

② 二十年ぶりに帰った故郷（近景）

▽故郷の我が家の様子を象徴する一文

屋根には一面に枯れ草のやれ茎が、折からの風になびいて、この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を説き明かし顔である。

説き明かし顔 Ⅱ 説明しているふう Ⅱ 物語っているよう

○つまりどんな状態か

没落し、荒廃してしまった状態

◆母の様子

◎ 母は機嫌よかったが、さすがにやるせない表情は隠し切れなかった。

やるせない Ⅱ 施すべき手段がなく、どうしようもなく
つらく悲しい気持ち。

○機嫌がよい理由▽ 息子が二十年ぶりに帰ってきたから

○やるせない理由▽ 母にとってもなじみ深い故郷から異境の地へ引越
さねばならないから

すぐ引越しの話は持ち出さないのも、わたしと共有する気持ち
と、わたしを気づかう気持ちから Ⅱ 嫌な話はあたまわしにしたい

★回想（思い出）の中にあるレントウ

◎ このとき突然、私の脳裏に不思議な画面が繰り広げられた

▽不思議な画面の内容とは（はじめの五字）おわりの五字）

紺碧の空に てしまふ。

少年レントウのイメージー《空想・幻想のイメージ》

▽不思議な画面に現れる色

紺碧（空） 金色（月） 緑（すいか） 銀（首輪）

○その色から感じ取れる共通点とは

キラキラ輝き美しい

鮮やか 光沢（月光に照らされるスイカ） ファンタジック など

▼ 艶のいい丸顔の少年レントウとむすびつくイメージ

○その幻影の色とはうらはらの（対照的な・対比関係にある）現実を表現
した色を用いた言葉とは何であったか

鉛色の空 どんよりとして光沢のない新鮮味に欠けるイメージ

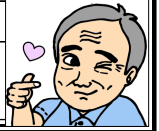
国語学習プリント

date : 年 月 日

学習内容：状況の中で--自分は何を思うのか

故郷 魯迅 ワークシート②

氏名



▽ルントウ(閏土)という名前の由来

閏月の生まれで、五行の「土」が欠けているところから

閏月＝旧暦(太陰太陽暦)において、二十四節気の月の名(何月であるか)を決める「気(中気)」が存在しない月のこと

中気
①雨水 ②春分 ③穀雨 ④小満 ⑤夏至 ⑥大暑
⑦処暑 ⑧秋分 ⑨霜降 ⑩小雪 ⑪冬至 ⑫大寒

五行＝木・火・土・金・水

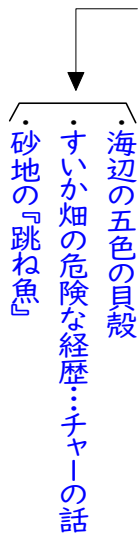
▽少年時代(回想)のルントウの容姿

艶のいい丸顔で、小さな毛織りの帽子をかぶり、きらきら光る銀の首輪をはめていた。

明るく健康的で親にも愛され生活にもそれほど困っていない様子
自然児

◎ルントウの心は神秘の宝庫といっているのはどこからか。

(私の知らないこと) をたくさん知っているところ



●ルントウと比較して、私や私の遊び仲間(友達)の境遇を表した部分
高い塀に囲まれた中庭から四角な空を眺めているだけ

閉鎖的な環境「井の中の蛙大海を知らず」状態であること
この町全体が城壁のような塀に囲われていた

比喩表現

▽この子供の頃の思い出が私にもたらしたもの

私はやっと美しい故郷を見た思いがした。

現実の故郷の様子と対比する光景

③ ヤンおばさん

▽現在の姿(容姿・外見)

頬骨の出た、唇の薄い、五十がらみの女

両手を腰にあてがい、スカートをはかないズボン姿で足を開いて立ったところは、まるで製図用の脚の細いコンパスそっくり

ガリガリにやせている纏足の足先

纏足＝清朝時代まで続く中国の女児の風習で、足が

小さいことが美人とされた

辮髪(弁髪)＝男性の風習

魯迅は古い無用な慣習に嫌悪感を抱いていた。

日本で言えば、「散切り頭をたたいてみれば、文明開化の音がする」で知られる「斬髪」。かつてはちゃんまげであったように

▽昔のヤンおばさんを象徴する言葉

豆腐屋小町(豆腐西施)

美人であり、看板娘として、一日中店先に座っていた。

① 蔑む (さげすむ) 相手を見下し、ばかにすること＝輕蔑

② 嘲る (あざける) ばかにして笑う＝嘲笑

▽フランス人のくせにナポレオンを知らず、アメリカ人のくせにワシントンを

知らぬとは、つまり、どういふことをいっているのか。

誰もが知っている当たり前のこと(当然のこと)を知らないこと

▽行きがけの駄賃に、母の手袋をズボンの下へねじ込んでとは

出て行くついでに、母の手袋を駄賃とばかり盗んでいた

▽現在のヤンおばさんはどのような人なのだろうか(内面)

貧しい卑しいひがみっぽい 心がずさんでいる やりた放題
後の「野放図」

国語学習プリント

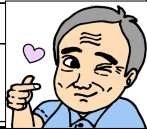
date : 年 月 日

学習内容：状況の中で--自分は何を思うのか

年 組 番

故郷 魯迅 ワークシート③

氏名



④ 現在のレントウ

▽そのレントウは、私の記憶にあるレントウとは似もつかなかった
《昔と比較し、表にまとめる》

	顔		昔のレントウ
身に着けているもの	小さな毛織りの帽子 きらきら光る銀の首輪	血色のいい、丸々した手	現在のレントウ
	艶のいい丸顔	表情 ・深いしわが畳まれていた ・目の周りが赤く腫れている	顔色 黄ばんでいる
		太い、節くれだった、しかもひび割れた、松の幹のような手	

▽悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた

○そう感じるきっかけとなったことは

レントウが私のことを「旦那様」とよんだこと

○「悲しむべき厚い壁」とは何をたとえた(何を象徴する)ものか。

身分や境遇の違い(格差) 互いを分け隔てるもの

○私の母は、この時の私とレントウの様子(関係性)がどう見えたのか。

他人行儀

◇レントウの息子(シュイション「水生」)について

・私がシュイションを見て思ったこと

これですごく三十年前のレントウであった。いくらか痩せて、顔色が悪く、銀の首輪もしていない違いはあるけれども。

《まるで昔のレントウのよう》

▽レントウの境遇を知り得て、私は彼をどんな人間と言っているか。

でくのぼう みたいな人間
とは▼

木偶の坊(でくのぼう)

木の人形。役にたたない者。人の言いなりになっている
自分の意思をもたないあやつり人形。

◇何が彼(レントウ)をそうさせたのか。《原因》

子だくさん、凶作、重い税金、兵隊、匪賊、役人、地主

▽母は、持っていかなぬ品物はみんなくれてやろう、好きなように選ばせよう、と私に言った。ところから、レントウが選び出した品物。《全五品》

長テーブル二個、椅子四脚、香炉と燭台一組、大秤一本、わら灰

⑤ 旅立ちの日(異郷の地へ向けての出発)

▽私も、私の母も、はつと胸をつかれた。

○その原因となったきっかけとなる言葉とは

「だって、シュイションが僕に、家へ遊びに来て。」「ホルの言葉

◆この言葉から私や私の母がわかったことは

ホルとシュイションの関係が、昔の(私)と(レントウ)の
ように心が(通い合う関係)になっていたこと。

▽ヤンおばさんは、この発見を手柄顔に

・この発見とは→灰の山から碗や皿を十個余り掘り出したこと
(何を発見①)

・手柄顔の理由→レントウが盗むために埋めて隠していたこと
(手柄顔する発見②)

○その挙句、ヤンおばさんがしたこと。

「犬じらし」をつかんで飛ぶように走り去った。盗んでいった
纏足用の底の高い靴(走りづらい靴)でありながら逃げ足は速い。

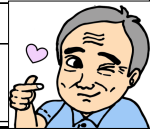
国語学習プリント

date : 年 月 日

学習内容：状況の中で--自分は何を思うのか

故郷 魯迅 ワークシート④

氏名



▽名残惜しい気はしない。 すいか畑の銀の首輪の小英雄の面影は、元は鮮

明このうえなかったのが、今では急にぼんやりしてしまった。について

○なんて、こんな気持ちになってしまったのか。

美しい故郷の象徴であつたルントウとの思い出が、色あせてしまつた(ルントウも変貌していて、昔のルントウではなかつた)ため。

▽これまでのそれぞれが経験してきた「生活」

○私 〓 むだの積み重ねで魂をすり減らす生活

○ルントウ 〓 打ちひしがれて心が麻痺する生活

○他の人 〓 やけを起こして野放図に走る生活

▼この他の人の代表として描かれた登場人物とは

(ヤンおばさん)

※◆私が希望することは

私たちの経験しなかつた新しい生活をもつこと

身分や境遇の違いを超えた、心が通い合う生活

▽私はどきどきとしたのは、私のいう希望も手製の偶像にすぎないと思つた

からなのですが、手製の偶像とはどんなことか。

(語句) 偶像 〓 木・石・土・金属(などの具体的な物)で作つた像

対象に似せて作つた像 本物ではない像

未だ実体のはつきりしない確かではないものに、価値を感じ望みを託していること

○彼の望むものはすぐ手に入り、私の望むものは手に入りにくい

彼の望むもの 〓 香炉と燭台

私の望むもの 〓 新しい生活

▽海辺の広い緑の砂地が浮かんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い

月が懸かっているとは、何を表しているか。

かつてのルントウと重なるおぼろげな (希望) のイメージ

資料

時代背景・情勢			魯迅に関すること		
西暦			西暦	年齢	
1894	日清戦争	～1895	1881	0	地主のの長男として生まれる
			1893	12	祖父が不正事件で投獄
			1896	15	父が病死
			1898	17	軍の学校(南京)に入学
1904	日露戦争	～1905	1902	21	日本に官費で留学
			1904	23	仙台医学専門学校に入学
			1905	24	幻灯事件
					中国人がロシアのスパイ容疑で処刑されるスライド
1911	辛亥革命	～1912	1906	25	仙台医学専門学校退学。東京へ。
			1909	28	帰国。杭州や紹興の中学校教師となる。
			1912	31	新政府の事務官となり、北京へ移転
					教育部で働く傍ら
1914	第一次世界大戦	～1918			文学革命の道へ
			1915	34	「新青年」創刊
			1918	37	「狂人日記」発表
			1919	38	母を迎えに紹興に帰る。
1919	五・四運動	抗日、反帝国主義を掲げる民主化学生運動	1921	40	「故郷」「阿Q正伝」発表。
			1923	42	小説集「呐喊」発表。
			1926	45	「藤野先生」発表。
			1927	46	政府批判による弾圧が強まり、上海へ。
1929	世界恐慌		1929	48	長男誕生。
1931	満州事変	柳条湖事件をかわまりにはじまる			
1932	満州国建国	傀儡(かいらい)国家			
1937	盧溝橋事件	日中戦争勃発	1936	55	結核により死去。

▽もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

から読み取れる私の思いを想像しよう。(主題に迫る)

人々の心の改革を進めるためには、同じ志を持つものを多く集めること。その先に希望が見える。